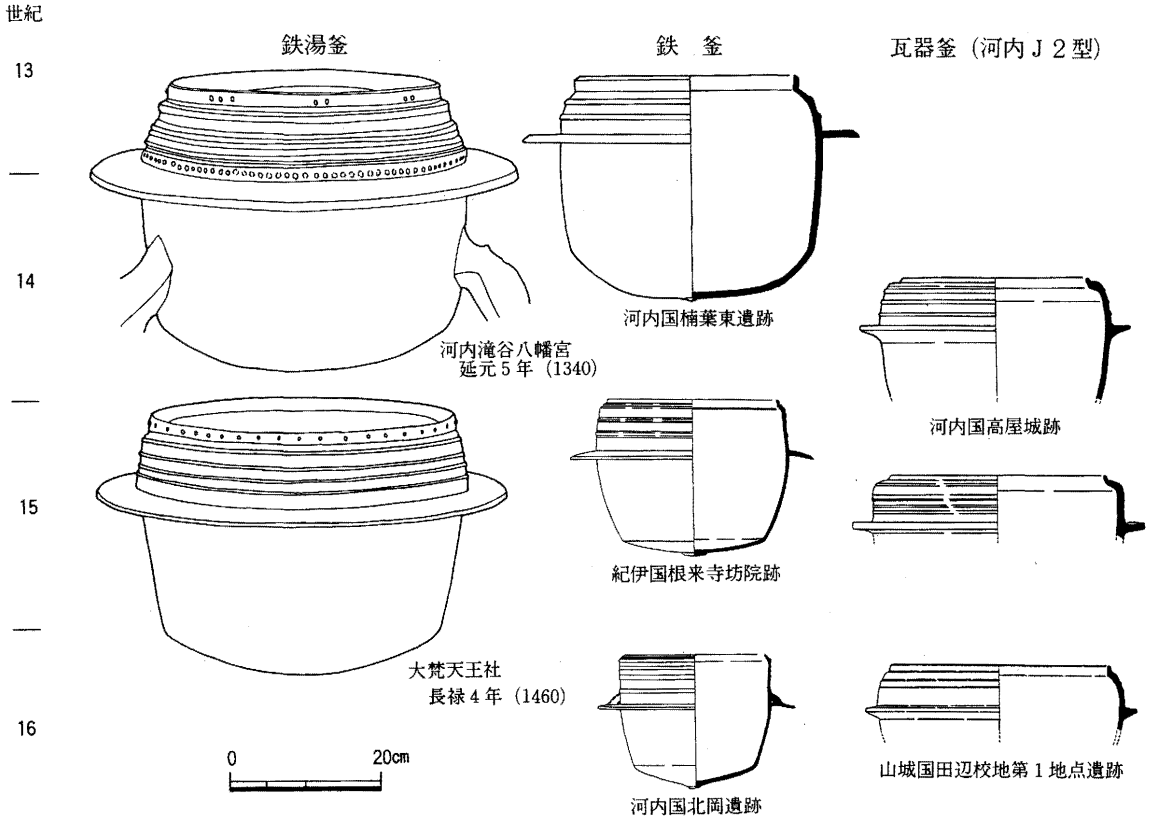
付　　論　根来寺坊院出土の鉄釜と五徳

井戸ＳＥ1001から鉄製の釜と五徳が一緒に出土した。この鉄釜は小型であり（口径22.5cm、器高20.5cm）、ご飯を炊く釜として使用されたとも考えられるが、その形態が大型の湯釜に近く、一緒に使用されたと思われる五徳（高さ45cm，脚幅５cm，脚厚３cm）が特に大きいこと、また絵巻物によると、一般の煮炊きの場合、鍋は小型の五徳にかけ、釜は竈（ヘッツイ）にかけて使用していることから、このたび出土した鉄釜・五徳は神社の社頭で使用された湯釜と同用途をもつものと考えられる。このことは坊院内において湯立ての儀式が行なわれたことを示しており、根来寺坊院内における神仏習合の事例の一端を見るのである。

この鉄釜と同形態の瓦器釜（河内Ｊ型）が大阪府下、特に旧河内国で多く出土している。ここで14世紀以降の河内国における土釜についてみると、伝統的に製作されていた土師器釜Ｂ型にとって替るかのように新形態の瓦器釜河内Ｄ１・Ｄ２型が出現し、次いで瓦器河内Ｊ１・Ｊ２型が続いている。河内Ｄ１型は鉄釜を写したものであることは前回述べたが、[註] 河内Ｊ２型についてもその形態から鉄釜を写したものであると見られる。河内Ｊ２型の頸部装飾は、14世紀代のものは頸部外面に３つの凸線をめぐらしているが、15世紀になるとこの凸線は低くなり、また凹線状を呈するものもある。しかし16世紀になるとこの凸線は沈線に変っている。

近年、河内国で湯釜の形態に近い鉄釜が２点出土しており、これらの鉄釜は河内の鋳物師により製作されたものと考えられる。根来寺から出土した鉄釜はこの鉄釜の形態に近く、同じく河内の鋳物師によって製作された可能性が高い。その製作時期は瓦器釜河内Ｊ２型の編年的位置から見ると15世紀前半と推測される。

註　今回、土釜の資料の増加にともない前回分類した瓦器釜河内Ｊ型をＪ１型とＪ２型に細分した。（菅原正明　「畿内における土釜の製作と流通」723－734頁　『文化財論叢』　1983年）